方へ集まつて居る。だから血管に働くものゝ實驗には申分ない腹の皮だ。

助手達はヒツペがした蛙の皮膚の胸部の方の端をさがして動脈の中に細い硝子管をしつかりさし込んだ。そのガラス管の上には細いゴム管が續いてその上にリンゲル氏液のはいつた硝子筒がある。ゴム管からリンゲル氏液が通り初めると、下にブラ下つてゐる皮膚の靜脈から血がポト／＼と滴落した。その滴が落ちる度に下にある竹のヘラがかすかに動く。その動きがてこの理で、ス、を塗つた紙にあたつた針を動かした。

「大抵い、だらう。」

一分間に落ちる滴數が一定になつた。

で、グレタ・ガルボの血清が此ゴム管内に注射されて、血清の中にある血管を收縮させる物質が、リンゲル氏液と混じて、蛙の血管に働く。その結果一分間に落ちる滴數が減ずる事になるのだ。それがス、をぬりつけた紙に書き出される。

かう云ふ譯で、人工的脚氣になつたグレタ・ガルボの毎日の血からとつた血清が、藥物學教室に送られて來て居たのだ。人工的に造つた脚氣から人工的に全快したグレタ・ガルボが今日

偶然此實驗室にはいつて來たのだ。

「やア來たかい。病氣はどうだ。」

「え、、もうすつかり。」

「さうか。君の血清を今檢べるところだ。」

「私の血清？」

「うん、君が正に入院した日から、ビタミンB缺乏食を食べ出して、脚氣症狀を起し、それからビタミンBを飲まされて、すつかり癒りきる迄の毎日の血清が此通り並んで居るのだ。おかげ樣で一つ副論文が出來る譯さ。」

「何ですの、その木の葉見たいなものは。」

「木の葉とはなさけないな。苦勞してとつた蛙の腹の皮さ、今リンゲルを灌流してるんだ。之れから君の血清を入れて見て、下に落ちる滴數がどう變るか、つまり血管が君の血清でどれ程收縮するかどうかをしらべるのだ。」

「あらッ……」

とグレタ・ガルボは自分の名の書いてある血清アンプレの箱に並ぶ箱を見た。

「何だい。」

「之れは川村五郎と書いてありますわね。」

「さうだよ、何故。」

「此人の血清なんですか。」

「さうだよ。此人も志願兵でね。之れは又君とは全くちがつて、脚氣菌と云ふ奴をのんで脚氣になつたのだ。その人の血清と君の血清とを比較して公平な判斷を下すのが、僕等の今の仕事なんだ。」

「此川村と云ふ人も脚氣になつたのですか。」

「なつたどころぢやない、脚氣衝心の危險迄あつたのだ。だからまだ入院してるだらう。」

「では前の病院に。」

「あゝさうさ。僕等は此血管に對する血清の影響を檢べるのだし隣の室では腎臓に對する君の血清と此人の血清とを檢べて居るだらう。蛙の腎臓を一生懸命顯微鏡でのぞいて。」

三

グレタ・ガルボはカモフラがまだ入院して居るときいて、急に遇ひたくなつたので此教室を出た。一つにはカモフラの飲んだ所謂脚氣菌が病室での出來心の接吻で、自分の口にも移つたに相違ないのを思ひ出したので、公平な判斷をするつもりで一生懸命になつて居る醫學者達に氣の毒にもなつたから、此教室にはもう居たゝまれなくもあつたのだ。

グレタ・ガルボは今日迄一向復讐をしようともしないカモフラが何となくいとしく思はれて戀人の病床を訪ねる樣な氣分で、一度訪ねた事のある病室へ向つた。

……もう今更行きどころがないと云つたが、どんないきさつで又もとの病室へ舞ひもどつたのだつたらうか……それがグレタ・ガルボの一つの好奇心でもあつた。

カモフラはもとの病室に居た。

「しばらく。」

グレタ・ガルボは笑ひながらカモフラを見た。カモフラはすつかり痩せて居たが、思ひがけ

ぬ女の訪問に上半身を起した。

「又御入院なさつたんですつてね。」

「どうもお恥しい事だよ。あれから行きどころがないので無料宿泊所にゴロ〳〵しながら、ホントのルンペンになつてしまひましてね。ところが半月程すると立派な脚氣になつてしまつて足は動かなくなる動悸はするからだはむくむ。何とも仕方なくなつて、此處へお詫びして入院させてもらひました。先生はすつかり大喜びで脚氣菌でこんなに定型的の脚氣の起つたのは初めてだ、と下へもおかぬ待遇をうけましたよ。さう云ふ譯で一時危篤狀態に迄なりましが幸脚氣の病原が此處では分つてゐるので、治療の効果が現れて、やつと此位になりました。だから一時は夜逃げをしたのですつかり腹を立てゝしまつた社長も、近來は御機嫌がなほつて毎日社員を見舞によこして呉れる樣になりました。やつとそれで將來又醫界週報で働ける事になりました。君の方はどうだつたのです。」

「私、あれから、程なく足がしびれて來ましたが、そんなに重くもならずに癒つてしまひました。」

「さうでせうね。何しろ私は野菜サラダに混ぜて、うんと多量の脚氣菌を飲んだのですが、あなたはホンノ少々……」

赤味がカモフラの頰にさして來た。カモフラは、「脚氣は脚氣菌の傳染なり」を確信してゐるのだ。グレタ・ガルボはビタミンBの缺乏症卽脚氣を信ずるべき根據が實際になかつたので、カモフラの話をきいてゐると、脚氣傳染病說に加擔しさうになつて來た。それがグレタ・ガルボには恐ろしかつた。

「僕は全快後も此處の先生のためならば、どんな實驗臺にもなる決心をしてゐるんです。命の親ですから。」

命の親ではあるかも知れないが、その命の親になる種を二樣に此處の教授は蒔いてゐるのだ。學者として確信を持つ脚氣の病原を先づカモフラに飲ませたのは此教授なのだ。そして生命の危機に陷らせて改めて救つたのも此教授なのだ。鼠とりの金籠にかゝつた鼠を籠のまゝ、水に沈めて、鼠が最後の苦しい氣泡をブク〳〵と出した時、水からあげて水を吐かせて生き返らせると同樣なのだ。グレタ・ガルボは奇妙な氣分に捕へられた。

「今ね私、藥物教室へ一寸寄りましたのよ。そしたらば私とあなたの血清を比較研究をしてゐるんです。藥物の教室は局外中立の公平な批判者として、脚氣の原因を決定しようとしてゐるらしいのです。然もあなたの血清を傳染說の材料として、私のをビタミン說の材料としてゐるのです。私學者の間拔けさ加減を嘲ひたくなりましたの。もつともあの日の私達の事は誰も知らないんではありますが……」

グレタ・ガルボがかう云つた時、カモフラは急に謹嚴な顏になつた。

「私は正直にお話します。私はあなたとキツスした事を此處の先生に打ちあけたのです。」

「え？」

「しばらくは何も云はなかつたのです。然し私が夢からさめた樣に氣がついた時……四五日は私全く意識がなかつたのです……その頃私は自分が此處を夜逃げした理由を話す氣になりました。それで私はあなたに逢ひたくて此處を逃げたと云ひました。キツスの事もスツカリ話してしまひした。」

カモフラは落着いて話したのだが、グレタ・ガルボはすつかり狼狽してしまつた。

「それはほんとなんですか。」

「本當です。私がそれを話した時、教授はクス〳〵笑つたゞけでした。」

カモフラはます〳〵落着いて來た。グレタ・ガルボはしばらく下を向いてゐたが、急に顏を上げた。

「何て卑怯なのだらう。此處の教授は……」

「あはゝ、さア卑怯かも知れませんよ。私が話した時クス〳〵笑つて、そいつは痛快だなと云ひました。だからあなたも早くあなたの先生に白狀しないと、とんだ事になりますよ。」

「……」

カモフラはかなり陰性的ではあるが、グレタ・ガルボに完全に復讐したのだつた。

鯛

一

コレラ來る！、と新聞が書くと、その日から魚河岸はあがつたりだ。毎年秋刀魚と前後して南支那の港から來る船が、コレラ菌迄つみ荷して來るのだ。

日本と云ふ國は四方海だし、コレラが越年する程、醫學の發達しない國でもないから、船さへ注意すれば、コレラは侵入しはしない。だから港には檢疫所が目を光らせてゐる。だが船が流行地を出航して、日本の港へ入る迄に早くても四五日はかかるので、コレラの潛伏期は大抵經過して、入港前には發病する。だから折惡くその船に乘り合せた船客は檢疫所に四五日はとめ置かれる。

人間から直接人間への傳染の方はこれで大體豫防出來るが、船中での發病者の排泄物は海の中にすてられるので、海水は病原菌でけがされる事となる。此海からの魚が危險であつて、刺

身一片が百人の命をとる結果となるのだ。

奇妙な性質の醫者が居た。要するにつむじ曲りの部ではあるが、强盜の眞似をして自分の細君を氣絶させたので、名聲嘖々であつた。その年のコレラはかなり流行が猛烈で、生物一切嚴禁のお布令が出た程だつた。

「お早うございます。」

先生が庭で深呼吸をやつて居る時間を見計らつて魚屋が來る。

「大分猛烈なので、もう捨値でかへますよ。」

魚屋はアルコール綿で手をふきながら云つた。

「さうか、そいつは有難いな。では捨て値で賣つて行けよ。」

「えゝ、承知しました。鯛ちりは如何です。」

「結構だ。では勝手へ廻れ。」

先生は縁から上つて勝手へ御出張だ。

「おい、鍋を出せ。」

女中は當惑して先生を見たまゝ立つてゐる。

「早く出さんか。」

どら聲をきゝつけて奥さんが出て來る。

「あなた、どうかそれだけは。」

「又馬鹿を云ふか。お前はだまつて引つ込んでゐろ。おい鍋を出さんか。」

女中はどうしていゝのかまご〳〵してゐる。奥さんはいやな顏をして女中に云つた。

「さきや、お前こつちへ逃げておいでなさい。」

「はい。」

女中は先生の側をすりぬけて茶の間に立つ奥さんの傍へ來て立つた。

「馬鹿のあつまりだ。よしおれが一人でやる。」

先生は大きな鍋を持つて、

「さかなや。」

と大聲で呼んだ。

「はい。」

魚やが荷をかついで門から勝手へ來た。

「一寸待て。」

先生は大きなたらひを二つ持出して、程よくならべる。

「此の中へうまく一つづゝ入れるのだぞ。水をはねさせるな。」

「へい。」

魚屋は天秤棒の調子をとつて、たらひの中に荷を一つづゝ入れた。

「よし。」

「之れです。いゝ鯛でせう。」

「なる程、五ッにきつてくれ。その中でやるんだぞ。」

「へい。」

魚屋は荷箱の中で鯛を料理した。

「よし、水をとばさない樣に、此鍋に入れろ。」

「へい。」
魚屋は鯛のきれを一つ宛先生の持つ鍋に入れた。
「よし、手を消毒しろ。」
魚屋は荷の中にある皿からアルコール綿を出して手を消毒した。
「よし、出て行け。」
「へい。毎度ありがとう。」
魚屋は出て行つた。先生、鍋を地に下した。
「おい二人出て來い。」
仕方なく二人出て來た。
「お前此鍋の中へ蠅を入れない樣に氣をつけてゐるんだぞ。蠅が一匹でもとまつたらば、その蠅の足にコレラ菌がつくぞ。それからさきはそのさらし粉の水を持つて來て、此たらひに入れろ。」
命ぜられた樣に細君と女中はやつた。

「それでよし。鍋を持つて入るのだ。」
「いやですわ、あなた持つて下さい。」
「非科學的な奴だな。コレラは消化器傳染病だ。なめさへしなければうつりはしない。よしおれがもつて行く。」
先生自身鍋を勝手へ持ち込んだ。
「瓦斯に火をつけろ。」
先生は自分で砂糖と醬油をついだ。
「此位でいゝのか。」
「味はつて見なくては分りません。」
「馬鹿を云ふな。今味はつたら五日後の朝から下痢と嘔吐だ。」
先生はブツ〳〵と魚の煮へ出す迄監視してゐる。
「もう大丈夫。おい酒をつけろ。」
「又朝からですか。」

「きまつとる。こんな時でなくては細菌學の教授などと云ふ貧乏人はうまいものは食へない。コレラが下火になつて魚が高くなる迄休暇だ。」

「でもあなたはさうして學術的におやりになりますからいゝですが、うちでお魚を買つたから大丈夫だとあの魚屋が宣傳して居るさうですよ。若し近所にコレラが出たら困るぢやありませんか。」

「近所の無智に俺が責任がおへるか、考へても見ろ。」

二

が然し教授も此手數には降參した。其處で教室の助手に命じて新研究を始めさせたのだつた。コンクリートのプールが出來た。

「夏になつたらば行くぜ。」

と他の教室員は喜んだものだが、鹽水が入れられたので變だと思つた。まぐろが七八匹此プールに放り込まれた時は誰でもビックリしてしまつた。

「いかんな、どうも。まぐろがはねるので危險だ。もつと從順な魚がないだらうか。」

魚河岸組合長は教授の言葉をきいて、

「鯛は如何でせうか。」

と御用聞きの魚屋らしく伺ひを立てた。

「さうだ鯛なら鯛ちり……」

と教授ののどがくびりと鳴つた。

でまぐろは魚河岸の兄い達が刺身にして教室の晝の食堂をにぎはして、プールには鯛が泳ぎ廻つた。

「何をなさるのでせう。」

グレタ・ガルボもびつくりした。教授によばれて研究室へ歸つて來た園部學士が、室に入るや否や大聲を立てた。

「おい、大變な事になつたぜ。あのプールは見込ないよ。コレラ菌を入れるんだとさ。」

「コレラ？」

「うん、早速培養にとりかゝれつて云はれたよ。」

「どうするのだ。」

「コレラ菌が鯛の皮につくか、消化器に入るか。幾日生きてるかを研究しろつてさ。その代り魚河岸から魚はドン〳〵とれつて云はれたぜ。」

「なアんだ。どうも變だと思つたよ。モルモットを自費で買へ、もう研究費がないつて云ひながら、あんなすばらしいプールを造るんだからな。魚河岸から金が出るんだよ。もつともコレラ菌が海に入つても魚は差支ないとなればは魚河岸は大助かりだからな。」

「うん、秋刀魚の出る迄に仕事を仕上げろツて、先生が云つたぜ。」

かうして翌日の朝生きたコレラ菌がプールに投げ込まれたのだつた。それでプールの海水から菌の培養を園部學士はやらなくてはならなくなつた。

「一週間以内にコレラ菌は死ぬよ。もつとも隅から隅迄檢べる譯にもならないが。」

園部學士の下宿にはまぐろで毎日屆けられた。まぐろが尻を叩かれる樣な氣がした。

「いよ〳〵鯛を檢べろとさ。困つたよ。あいつ陸へあがるとピチ〳〵はねやがるのだから誰か手傳つて貰れないか。」

「いやだよ。魚河岸の手先になるのは。」

毎日の樣に面白がつてグレタ・ガルボはプールの鯛を見に來てゐた。

「御研究は如何ですか。」

「降參してるよ。海水の中でのコレラ菌の生命の方は大體きまつたが、魚の腹に入つてる奴の方がまだなのだ。何しろ魚屋をやつた事がないので、鯛の奴僕を輕蔑しやがつてね。毎日の樣に鯛を持つて來てもらつて、解剖の實習さ。魚屋ぢや本試驗の助手にも使へないし。」

其處へ病後のヒョロ〳〵足ではあるが、大分元氣の出て來たカモフラがやつて來た。グレタ・ガルボは面映ゆくてすぐに姿を消してしまつた。

三

「では君たのむよ。もつとも危險な仕事だから僕もしてゐるが、君にも豫防注射をして置く事にして。」

どうせ脚氣で一度は死んだ自分だと思つてゐるからカモフラは、此危險な仕事を買つて出たのだつた。一方には夜逃げ後のルンペン時代に二週間程カモフラは魚屋の飯を食つた事がある しそれでなくても馬の脚時代によく魚をあつかつた經驗があつた。

カモフラの心の底にはたしかにグレタ・ガルボに對する失戀の絶望感があつて、そのために彼は好んで危險な事に近づくのでもあつたのだ。

「豫防注射などしなくたつていゝのです。どうせ一度は死んだのですから。」

「然し萬一の事があると僕の責任だからね。僕は實は鯛の方を始める樣になつたらば、教室にとまつてゐるつもりなのだ。君もさうして呉れないか。自信がない樣だが、若しコレラ菌を外へ持ち出す樣な事でもあつてはならないからね。」

「えゝ、私もさうさせていたゞきます。」

話は萬事都合よく運んだ。カモフラは豫防注射をうけた。二日置きに三回ワクチン注射をうけてゐる間に、すつかり鯛の解剖の要領をのみ込む事が出來た。

海水に全くコレラ菌が證明されなくなつて十五日の日が過ぎて、一度海水の入れ代へを行つ

て、第二回のコレラ菌が又海水に投げ込まれた。今度は少し量が多かつたゝめか、一週間でもまだ菌は小量ながら檢出されて居た。

「まだ出るんだよ。だが水に菌が居る間に一度鯛を檢べる事も、どうせしなくてはならないのだから、明日一つ鯛をとつて見ようかと思ふのだ。これは當然鯛の皮膚には菌が居るのだから、餘程注意しなければならないのだが。」

夜になつて園部學士はカモフラに話した。

「私は少しも恐ろしいとは思つては居ません。」

「では明日やつて見よう。何しろ皮膚について居るとすれば、鱗の間などにあるに相違ないそれをヒョツとして內部に入れてしまつては、結果が疑はしくなるから、先づ鱗をとつてから皮膚を十分に消毒しなくてはならない。それがなか〳〵困難だらうと思ふよ。では今夜のうちに用意しておかう。」

園部學士は宿直の小使とカモフラをつれて、プールのそばの臨時研究室へ行つて、萬端の用意をした。居けられて居た鯛を二人は明日の實驗動物とみなして豫行演習をした。夜の三

時迄も熱心に研究してやつと園部學士は自室に引き上た。

カモフラは小使室の隣にあつた物置へ臨時にベッドを入た室で、ベッドの中にもぐり込んだが、妙に目がさへて來て、なか〳〵眠れなかつた。

一度此教室であつてから、もう半月近くなつてもまだ姿を見せぬグレタ・ガルボを思ひ出した。

……病氣にでもなつたのだらうか……

とふと不安になつたが、脚氣病室で逢つた時、眞面目な考で自分が云つた言葉……早くあなたも白狀しなくては……が、かなり彼女の自尊心を傷つけたのではなかつたらうか。さうとすればあんな事を云ふのではなかつたとさへ思はれる。

……自分は今でもあの女に戀してるのではなからうか……

カモフラは過去の自分の浮氣な戀の數々を思ひ出しては、今の心を檢討して見た。

……明日の朝でもあの女のアパートに電話をかけて見よう……

そんな事を思ひながら、いつか眠り込んでしまつた。

翌朝は睡眠不足のためか、どうもからだが疲れて居た。

午前十時にカモフラは園部學士によばれる迄自室のベッドにねころんで居た。昨日思つては見たが、夜かあけると、グレタ・ガルボに電話をかける勇氣がなかつた。

學士によばれた時には、あんなあばずれ女など、と云ふ反感を心に感じながら、元氣よく出て行つた。

「疲れたらう、昨夜おそくて。」

「いいえ、よく眠りましたから。」

「では鯛を一つとつて來よう。」

あみと大きな桶とを持つて二人はプールへ行つた。七月の梅雨あけの日が照つて居た。二人はマスクをかけた。

「君、あんまり大きくない奴を一つすくつて呉れ給へ。そして此桶に入れて呉れ給へ。僕は鯛のはねないうちにふたをするから。」

カモフラはプールを見渡した。十程の鯛がいう〳〵と泳いで居る。

「あれがいいな。」

と學士の指さす鯛をカモフラは追つてプールのふちを歩いた。その時突然「川村さん」と聲がした。カモフラは鯛に手のあみをのばして聲に顏を向けた。グレタ・ガルボー と思つてハッとした時には、もうカモフラのからだはプールに落ちて居た。「アッ」と人が叫んだ時、カモフラは水から顏を出したが、口から鹽辛い鹽水をはいて居た。

「待ち給へ、そのまま。」

學士は此コレラ菌の鹽水に落ち込んだ男をどう處分すべきかを考へたが、その瞬間グレタ・ガルボが水しぶきのかゝつた顏をハンケチでふいてるのを見なくてはならなかつた。注射！豫防注射！

「おオい、小使。」

學士は大聲でどなり續けるしかなかつた。自分の白衣も水だらけなのだ。

人間

一

カモフラ君は全く實驗動物として一身を醫學研究のために堤供して行く犧牲の精神に燃え立つてしまつた。

若い頃からめまぐるしく變つた生活環境のために、自分の心を眞面目にみつめる機會もなく卅二歳迄、云はゞ浮つ調子で過して來た彼の心を、根底からめざめさせて呉れたのはグレタ・ガルボに對する戀心であつたのだ。

今迄戀と自分で認めて居たものは、みんな浮氣だつたのだ。それもその筈で、今迄彼の前に現れた女性は、どれも皆戀愛の商賣人に過ぎなかつた。どの女性もかたい個性を彼の前に主張して見せなかつたのだ。

然るにグレタ・ガルボは之等の女性と正反對に全く個性の主張のみに終始する型の女であつ

た。此性格の强さがカモフラを徹底的に壓迫したのであつた。彼は初めてたよりになる女性を見出したのであつた。

所謂女道樂に身を持ちくずして、親から勘當されたのを却つていゝ事にして、旅役者の群に入つて馬の脚として座頭にこき使はれ、座頭の女房格の女にコツソリ可愛がられた頭から、彼は男性として去勢されたのだつた。

その後發奮して醫界週報の記者になつた當座こそ彼の男性は一時めざめて來て、世に對して戰つて行く力をとりもどしはしたが、矢張りそれは長くは續かなかつた。彼の心の底に流れて居るマゾヒスムスは、强い性格のグレタ・ガルボに戀の對象を見出したのであつて、一方彼は女に反感を持ちながら、實は非常な速度で女に引きづられて居たのに氣がつかなかつた。

遂に彼はグレタ・ガルボのために完全に打ちまかされたのだ。女性に負ける事によつて彼の慾望は却つて滿足されたのだ。そして故意に失戀を感じながら、彼はます〳〵マゾヒストとしての滿足を味つて居たのだ。そのマゾヒスムスの最後の運命として彼は死を希つて、實驗動物として醫學研究の犧牲者として死んで行くしかなかつたのだ。

が然しすべてのマゾヒストがさうである樣に彼のマゾヒスムスの中心も矢張り性的のものだつた。だから唯一の異性として彼を支配して居るグレタ・ガルボから全く離れる事はどうしても出來なかつた。グレタ・ガルボに殺されるのが彼の最大の滿足だつたのだ。

鯛とコレラ菌の實驗でコレラ菌の泳いでゐるプールに落ち込んだ時、彼はこのまゝ死ぬのは堪へられなかつた。幸にも彼は豫防注射をうけてゐたので發病はしなかつた。

彼がプールへ落ち込んだ時の水しぶきをあびたグレタ・ガルボが細菌學教室の一室に隔離されて潛伏期を無事通過する迄の日夜は、カモフラにとつては此上もないたのしい時だつた。彼は思ひのまゝにグレタ・ガルボと話す事が出來、又何くれとなく彼女の用を身自ら果す幸福に居る事が出來た。

グレタ・ガルボは此場合も、カモフラの心中をすつかり見ぬいた樣に、暴君が奴隷に對する態度で、遠慮なく男をコキ使つたり無理を云つたりした。その態度がカモフラにとつては此上もなくうれしいものだつた。

グレタ・ガルボが何の異狀もなく潛伏期を經過した事を園部學士から開かされた時、カモフ

ラは淋しかつた。別れの日の來たのをうらんだ。

が幸ひにもカモフラは絶望するには及ばなかつた。此の夏の休暇を利用して此の教室からは越後へ恙虫の研究隊を派出する事になつて、カモフラは勿論グレタ・ガルガも從軍記者として同伴する事になつた。

二

越後の恙虫流行區域では例年の研究隊の入り込みにあき〳〵して居た。大學から縣宛の依頼狀があつたので、警察關係だけは種々の便宜を計つて呉れたが、村民達は

「又お祭り騒ぎだけで、何にもならんスケ。」

といゝ顔をしなかつた。從つて研究隊の宿泊所もアチコチの安宿やあれ果てたあばら屋に別れ〳〵にするしかなかつた。

「病氣が出ても今年はみんなして默つてゐる事にしろ。血をとられたり痛い注射をされたりして嗤ためしにかけられるだけだからな。」

村民の態度がかうだつたので、研究隊は何の成績もあげられない樣な不安に滿ちてゐた。

從軍記者の二人、カモフラとグレタ・ガルボは駄菓子屋の二階二間をやつと交渉して借りた。その駄菓子屋のたつた一人の婆さんは申分なく慾が深かつた。グレタ・ガルボの洋裝から割出して、高い間代を請求したり、食物の買入れをたのめば、いつも高い口錢をはねてゐた。

それでもカモフラにとつては此宿が天國だつた。シミだらけの唐紙一重でグレタ・ガルボは通信を書いたりお化粧をしたりした。カモフラは婆あさん相手に、毎日の食物を心配した。男手で苦勞して造つた食物を膳の上に見る度に、グレタ・ガルボは

「食べられないわ、こんなもの。」

と惡口を云つた。

「もつと砂糖を入れゝばよかつたな。」

「味なんかの問題ぢやないわ。テンデお料理になつてゐやしない。」

叱られながらカモフラはうれしかつた。或夜などは半熟とたのまれて造つた玉子がかたゆでになつて居たと云つて、女はその玉子をカモフラの顔に投げつけた。奇麗にわけられたカモフ

ラの頭の毛が玉子の黄味だらけになつた。

「ぢやア、もう一つやつて來よう。」

とカモフラは上目で女を見て云つた。

「賴まないわ。もう私明日歸るわ。」

「そんなにおこるなよ。之から氣をつけるから。」

カモフラは手をつかんばかりにあやまつた。其處へ研究隊の本部から使が手紙を持つて來た。

「明日午前三時本部に集合、直ちに出發、日出迄川畔進軍、赤虫採集の事。注意、赤虫にさゝれぬため嚴重に皮膚を覆ふ事。」

カモフラはすつかり興奮してしまつた。

「では今夜は早く眠らう。」

「私は歸るんだから行かないよ。」

カモフラは泣かんばかりに歸京見合せを再三再四女にたのんだ。

「そんなに云ふなら一日だけのばして上げるわ。けれど私は行かなくつてよ。あなたよく情

況をおぼえて歸つて私に報告して下さいよ。」

「それで安心した。で婆さんからモンペをかりて來るかな。」

「何にするの。」

「ズボンだけではヒョッとして赤虫がはひり込むかも知れないからさ。」

「何を云つてるのよ。赤虫にさゝれて發病すれば先生達は喜ぶぢやないの。赤虫の研究ばかりで引き上たら、昆虫學者になつてしまつて醫學者とは云はれないわ。だからあなたがかゝつて上るといいのよ。」

「さうだな。さうしようか。」

カモフラはゾク〳〵とうれしくなつた。

「馬鹿ね。おだてればすぐにさうなんだから。もうおやすみなさいよ。私アミに手紙をかくんだから。」

アミと云はれてカモフラは急に心の冷たくなるのを感じて、スゴ〳〵と自分の室へ歸つた。絶望の谷底へ陷つた樣な氣分で彼はきたない蒲團の上に仰向きに倒れてゐた。

……ホントに赤虫にさゝれよう。そして初期からの症狀研究の材料として一身を捧げよう。そして死ぬのが自分の運命なのだ……。

甘い涙が彼の頰をつたつた。

三

淺い眠りの中でカモフラはグレタ・ガルボに叱られる夢ばかり見て居た。

「起きなくちや駄目よ。」

柔かい手の觸角を額に感じてカモフラは目をさました。グレタ・ガルボが派手な浴衣に細帶一つで枕許に座つてゐた。カモフラはスッと半身を起して女を見た。女は笑ひかけてゐた。それを見て狼狽したカモフラは、頭の毛を兩手でかき上げた。昨夜の玉子の黃味がバラ〳〵と頭から落ちた。

「さア起きるんですよ。もう二時半よ。」

「えゝ。」

カモフラは前をかき合せた。

「可愛いかたね。」

女が男の手をとつてかたく握つた。男はそれを握り返す度胸さへなかつた。

「さアお立ちなさい。そして本部へいらつしやい。」

「はい。」

男は立ち上つて洋服を着出した。女はそれを默つて見つめてゐた。十分ばかりで男はすつかり洋服を着てしまつて、初めて女を振り返つた。女は兩手を膝にのせて女らしいしなを造つてゐた。

「さて、出かけませう。今日歸りはしないでせうね。」

「……」

女は何も答へない。男は女の前へ來て向ひあつて坐つた。

「ねえ、歸りはしないでせう?」

「……」

女はまだだまつて居た。

「ねえ、僕をだましはしないでせう？」

不安に充ちて男が女の手にふれた時、女は急にその手をふりはらつた。

「くだらない男ね。意氣地なし！さつさと出ていつて頂戴！」

カモフラはスゴ〳〵と立つて梯子段を下りて行つた。そして表の戸をあけて出て行つた。その物音をきいてグレタ・ガルボは急に前にのめつて男の蒲團に顏をあてゝしまつた。かすかに女はしのび泣いてゐるのだ。

四

午前五時にカモフラは宿へ歸つて來た。

「お早う。」

圍爐裡に坐つてゐる婆さんはビツクリしてお客を見た。

「何だね旦那、あんないゝ奥さんのあるのに街へ夜遊びかね。」

それには答へずにカモフラは梯子をのぼつて行つて自室の障子をあけた。まだ灯つてゐる電燈の下にグレタ・ガルボは男の蒲團に打つ伏せになつてゐた。

「どうかしたんですか。」

女は答へずにかすかのいびきを立てゝゐた。男はしばらくそれを見つめてゐた。起さうか、それともそのまゝにして置かうか、と迷つて居る時、チクと横腹の皮膚が痛かつた。やられたな、と不安が背筋にかけ上つて來た。本部へ歸りがけに集つて、研究隊はからだについてゐる赤虫を一つ〳〵瓶の中にとつて來たのだつた。又チクリと痛かつた。

カモフラは雨戸をあけた。そして先づ上着をぬいで裏表を十分に檢べてからズボンをぬいだ。そして最後にコンビネーションをぬいで、ねまきをかたにかけた時、チクリと又さる又の中が痛かつた。大急ぎでサルマタをぬいで裏を返した時、其處には赤虫が二つ動いてゐた。

「あツ」

彼は二つの赤虫をしつかり指の間にはさんだ。

「もうお歸りになつて。」

女はしづかに起きて男のうしろによつて來た。

「やられましたよ。」

「え？」

女が男のかたを越して顏を出した。男は指の間の虫を見せた。

「くひつかれて？

と女は袂から紙を出して男に渡した。その紙に虫を包んで男は立ち上つてねまきの裾で腰を包みながら、自分の皮膚を見廻した。三ケ所をたしかにさゝれてゐた。

「やられましたよ。」

「ほんと。」

女は男の前に廻つて男の皮膚を見た。小さく虫のさした跡が赤かつた。

「まアほんとに。先生に話して？」

「まだです。今さゝれたんです。」

「あつ、大變だわ。わたし先生に云つて來るわ……それよりすぐに先生の所へ一緒

に行きませう。」

女は狼狽して着物を着換へに自室へ行つた。

男はねまきに帶をしめて窓によつて外を見た。すが〳〵しい朝の光がみちてゐた。

……これでいゝのだ……

男の頰に笑が上つて來た。

「川村さん、あなたも用意なさいましよ。悲觀せずに。」

「悲觀なんかしてませんよ。先生に今話しに行つたつて、昨夜みんな眠らなかつたさうですから眠つてゐますよ。どうせさゝれちやつたのですから、潛伏期から十分研究してもらへます。」

「あなた……」

女はすかつかり身仕度をして出て來た。

「あなた、どうしてそんなに落着いていらつしやるの。」

「あわてたつて仕方ないでせう。私これで恙虫病になつて研究のために少しでも役立つのを

喜んでるのです。」

「だつて……」

グレタ・ガルボの目に涙が光つた。

「どうせ私は實驗動物として一生終始する決心をしてるんですから……あなたもさつき出がけにそう云つたでせう。」

「……」

グレタ・ガルボの頰を涙が傳つた。

「本當に私心からさう思つてるのです！」

グレタ・ガルボは涙を拭つて男の顏を見つめた。

「これで死ねば實際滿足です。」

と云つた時カモフラの目から初めて涙が落ちた。

「すみません、川村さん。」

物に憑かれた樣にグレタ・ガルボは疊に伏して背に波を打たせて泣き出した。しばらく男は

涙に曇る眼で女の樣子を見つめてゐたが、靜かに女のそばによつて背に手をかけて耳に口をよせて云つた。

「誰の罪でもないんですよ。私がかう云ふ變な人間なんです。」

言葉の終は嗚咽になつてしまつた。その時梯子段から婆さんが顏を出した。

「奧さん、そんなにおこりなさるなよ。一度位旦那さんが夜遊びしたつて。」

昭和七年十月十八日印刷
昭和七年十月二十五日發行

第二診療傳餘白

定價壹圓六拾錢

著作者　正木不如丘

發行者　東京市神田區駿河臺淡路町一六番地
四條輝雄

印刷者　東京市神田區駿河臺淡路町一六番地
高田邦夫

發行所　東京市神田區駿河臺淡路町一六番地
四條書房
電話神田(25)三八〇番
振替東京一〇三八番

不許複製

(四條書房印刷)

外460

下村海南著 吳越同舟 定價壹圓八拾錢 送料十二錢

下村海南著 南船北馬 定價壹圓八拾錢 送料十二錢

下村海南著 刺客漫談 定價壹圓八拾錢 送料十二錢

沖野岩三郎著 太平洋を越えて 定價貳圓 送料十四錢

正木不如丘著 第二診療簿餘白 定價壹圓五拾錢 送料十二錢

トルストイ著 八住利雄譯 人生日記 定價壹圓六拾錢 送料十二錢

服部畊石著 芭蕉句集新講 上下各 定價壹圓八拾錢 送料十四錢

高橋學而著 近代科學の偉人 定價壹圓八拾錢 送料十二錢

東京神田 駿河臺 四條書房 振替 東京一〇三八

終